宮内由梨 個展「Scar Script」レビュー

鵜尾佳奈（愛知県美術館 学芸員）

本論では、宮内の《A Red Life》を起点に、gallery N（愛知）での個展「Scar Script」で発表された 4 つのシリーズについて、痒みと掻くことの表現の遷移に着目しながら論じる。

痒みは、皮膚にのみ生じる感覚で、医学の分野では痛みに比して研究対象になることが少なく[1]、痒みを抑えるための薬剤は近年までヒスタミン以外ほとんど存在しなかった。実生活においても、痒みは未だ軽んじられることが多く、内臓の痛みを訴えて心配されることはあっても、皮膚の痒みの主張は一笑に付されることもあるだろう。

また、痒みはそれ自体では医学的に定義することはできず、痒みから生じる掻破という行為やその衝動によって定義される[2]。痒くても掻かなければ病理とはならないと聞くと、それじゃあ掻くことを我慢すれば良いのではないかと考える人もいるだろうが、痒みが引き起こす掻破行動は容易に抑制できるものではない。痒みの病理としてよく認知されているアトピー性皮膚炎の場合、掻くことがやめられないことによって日常生活が脅かされることもある。当事者による現象学的記述によれば、「痛みが私と身体を強く結びつけすぎるのに対して、痒みは私と身体を引き剥がす」[3]。身体に対して当然もっているはずの主体的地位が、痒みに抗うことができない自分によって脅かされるのだ。

宮内の近年の作品は、主に作家自身の痒みを発端としており、痒みによって引き起こされる掻くという行為がしばしば制作の方法論に変換されている。まずは、2017 年に開始された一連の作品《A Red Life》について見ていこう。

《A Red Life》は、英国での長期滞在中に幼い頃から患っている皮膚炎が悪化したことを契機に作られた作品である。昼も夜もなく痒みが続き、皮膚を掻くことしかできなくなり、宮内は作品制作はおろか話すことさえままならない状態だったという。皮疹の苦しみの中で、宮内は向田邦子の実話に基づく短編『字のない葉書』を思い出す。『字のない葉書』は、疎開することになったまだ字の書けない妹に、「元気な日はマルを書いて、毎日一枚ずつポストに入れなさい」と言って父が預けた葉書に纏わる物語だ。幼い妹は疎開先から言われた通り毎日マルを書いた葉書を送ってくるのだが、マルは日毎に小さくなっていき、ついにはバツが書かれた葉書が届く。その葉書すら送られて来なくなり、母が妹を迎えに行くと、百日咳を患いシラミだらけの頭で布団に寝ている妹を発見するのだ。

---

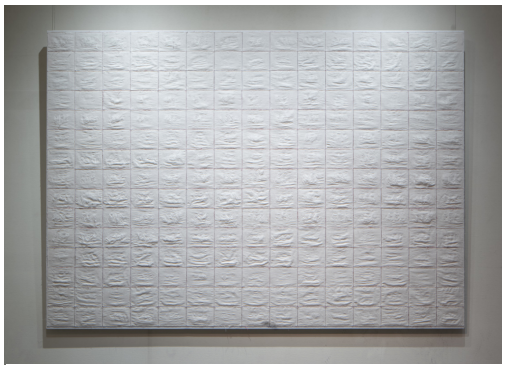
[1] 加戸友佳子「アトピー性皮膚炎における身体境界の『掻破』」、『現象と秩序』2020 年 10 月号、p. 1.

[2] 伊藤正男・井村裕夫・高久史麿編『医学書院 医学大辞典』、医学書院、2009 年、p. 462.

[3] 宮原克典「痒みの現象学試論 ： アトピー性皮膚炎の当事者研究の試み」、『UTCP Uehiro Booklet』、2016 年、pp. 149.

宮内は調子が良いときに葉書に綿布を重ねて縫い付け、表面をその日に肌を掻くのと同じ強さで引っ掻き、母やごく親しい友人へ送った。この時期に送られた葉書は、柔らかな綿布が抉れて下層にある赤い布が目地の隙間から見えるものもあり、特に痒みの経験を共有している家族にとれば、文章以上に作家／娘の身体を包む皮膚とその内側にある真皮や臓器の熱までも想起させるだろう。

《A Red Life》2023, gallery N


《A Red Life》2018-2022, 愛知芸術文化センター

向田の妹は自身の生存をマルの大きさとバツで表現したが、宮内は自身の健康状態を測る上で重大な割合を占める痒みの度合いを、4 本の指の跡が残る綿布とその捩れによって表現し、それは作家の疾患を知る親しい人々に向けて一直線に伝達された。その後回収された葉書が展示されたとき、元より他者には伝わりにくいはずの病理としての痒みが、鑑賞者には作家の身体に確かにあったものとして感じられ、同時に葉書を受け取った家族や親しい友人の憂いや心痛を追体験される。

帰国してからも宮内は本作の制作を続け、郵送する相手も少しずつ増えている（gallery N での個展では、画廊主の二宮夫妻宛に送られた葉書も展示されていた）。掻くこと以外何もできなくても続けることができる表現であり、作家が自身のライフワークと位置付ける作品である。

ところで、自身の生を親しい人々へ郵便で知らせる作品と聞いて、河原温の《I Got Up》（1968-79）や《I Am Still Alive》（1970-2000）を思い起こす人もいるだろう。ここでは細かい作品の説明は省くが、《I Got Up》は河原がベッドから起き上がった時間をポストカードにスタンプで記して郵送し、《I Am Still Alive》は「まだ生きている」というメッセージを電報で送信するという作品だ。いずれも郵便という時差が生じるメディアを通じて、作家の生存を伝えると同時に未来（あるいは現在）の死を暗示する作品であり、作家が決めたルールに基づいて長期間続けられた。とりわけ《I Am Still Alive》では、40 年間にわたって約 900 通という膨大な数の電報が送られている。

宮内は《A Red Life》の制作を始めたとき河原温の作品を知らなかったそうだが、あえて両者の作品を比べるならば、《I Got Up》や《I Am Still Alive》は、作家が生きている限り継続することができる表現だが、《A Red Life》は作家の皮膚疾患がもし寛解した場合（それはとても望ましいことだが）、親しい人々への健康状態の伝達が現状の表現である必然性が希薄となる。同作は、止めたくても止めることができない掻破行為の延長線上に作品制作を置くことで、掻くことが表現になった。本作は宮内の「ライフワーク」であると先の段落で述べたが、《A Red Life》を制作するために作家は皮痒の辛苦を手繰り寄せなければならず、

このことに気付いた鑑賞者には倫理的葛藤が生まれる。つまり、この作品を生涯続けるには、作家の皮膚疾患が治らず存在しなければならないのではないかという憂懼に駆られるのだ。とりわけこの葉書を受け取ったことがある著者には、例え優れた同作の制作が途絶えるのだとしても、叶うならどうか寛解してほしいとさえ思われる。

ここから本題として扱う個展「Scar Script」で発表された作品群の大部分は、それまでの痒みを起点とした表現から、掻くという行為のみが独立して方法論化することで、痒みという原動力とも言える強い制作動機から距離を置いた。今回の個展では大きく 4 つのシリーズが新作として発表されているため、《A Red Life》からの分岐を順番に分析していく。

前作からの連続性が最も強いのは、作家が初めて作陶に取り組んだという《Scar Script – kidney》と《Scar Script – Stones》だろう。しかし、ここでは掻くという動作から離れ、痒みからくる個人的な苦しみの経験が凝縮されている。

作家はまず、自分が幼少期に暮らしていた長野の生家の土と、現在活動拠点としている横浜の住まいの土を混ぜ、そこに柿・桃・ドクダミの葉、塩、ステロイドを練り合わせたものを成形し、盤状の陶土の上に置いて窯で焼いた。土に混ぜた植物や薬品は、皮膚炎の抑制のために作家が幼い頃から摂取・塗布してきたもので、盤の上には様々な混合物の成分が溶け出し、その形跡が残る。白い斑点は植物のカルシウム、輪郭線のように残る黒い模様は塩が溶け出したことによるもので、よく見ると結晶化した塩がきらきらと瞬いて見える。混成し、成形した土塊は《Scar Script – Stones》、その形を模様として残す盤は《Scar Script – kidney》と題されて展示された。

《Scar Script - kidney》2023

通常、陶器の外観から 1000 度を超える温度で焼成されたことが脳裏に浮かぶことはないが、《kidney》には臓器に似た赤みのある褐色の形象がはっきりとした輪郭をもって焼き付けられており、そこで腎臓が高温で溶けたかのようだ。本作は、作家自身が経験した痒みによる内臓が燃え上がるような感覚を、作品にしてみたいという思いが制作の動機となっているという。

《Scar Script - Stones》2023

宮内がもつ皮膚疾患には根本的な治療はなく、炎症を鎮静するステロイド外用薬の塗布が基本的な対症療法となるが、ステロイドは使用を中止するとリバウンドと呼ばれる激しい痒みの揺り戻しが起こるため、1990 年代にその使用を巡って論争が起こり、現在もその使用には慎重な声がある[4]。そのため、ステロイドフリーの治療

[4] 加戸友佳子「アトピー性皮膚炎における身体境界の『掻破』」、『現象と秩序』2020 年 10 月号、p. 2.

法として、抗アレルギー作用のある成分が含まれる植物や、止痒効果があるとされる塩水が、民間療法、あるいは補助療法に用いられたようだ。宮内は自然療法に効果を実感できなかったそうだが、ステロイドも含めこれらの物質は痒みへの対処のために長年摂取し続けてきたものであり、自身の身体の成分を一部構成するかもしれないもので、治療への徒労感だけでなく思い入れもあるのだろう。この度の個展で発表された作品の中で、作家の個人史が文字通り練成された唯一の作品でもあり、また表皮の痒みでだけではなくその奥にある臓器の熱さが表現され、痒疹の経験のない鑑賞者にもその現象を知覚できるよう伝達が試みられている。

だが《Scar Script》という絵画のシリーズでは、これまでにはなかった新たな展開がみられる。作品表面に引っ掻き傷らしきものはあるものの、それらは完全に記号化しているのだ。今回展示された 6 点の中から、《Scar Script IV》を例にとって描写してみよう。キャンバスには何層か絵具が塗り重ねられ、全体的に黄色の靄がかかったかのような画面の、上部には緑や青、そして僅かに赤が混じる。画面の中央を横切るように、表面を削り取るように描かれた直線が 2 本あり、上部の線上には短い線が縦方向に 7 本引かれ、その 2 本の線の左側には垂直線が引かれる。これらの主に水平線と垂直線、またその重なりによって表されたモチーフは 5 種類あり、作家によって決められた意味のある文字なのだという。

今回発表された全てのタイトルに共通して入っている Script、すなわち刻印された文字、という語には、特に本作では「掻く」と「書く」、そして「描く」という 3 つの行為が重ねられている。宮内が日常的に続けてきた「掻く」という行為が、ここでは意味ある文字を「書く」ことに置き換えられ、さらには油絵具やパステルを塗り重ねる「描く」ことに敷衍する。

次に紹介する《Scar Script - Psyche》の制作方法はこうだ。楕円に成形したキャンバスに、柿の葉で斑らに染めたガーゼを 10 枚重ねて張り、その表面を横一文字もしくは縦一文字に切り裂き、次に長い切れ目に交差するように短い線でいつくか傷をつける。そうしてガーゼの表面にできた切れ目を、手術用の糸で縫合する。オーバルのシェイプト・キャンバスと生成色の綿布は直接的に皮膚や肌を想起させ、深く切り裂かれて抉れた目地やその周辺の色素沈着したかのような滲みはより痛々しい。だが、そこにつけられた傷はすぐに縫い合わされるための傷であり、ここでは傷の修繕に重点が置かれている。ルチオ・フォンタナはキャンバスを切り裂いてその奥に無限の空間を見たが、身体を自ら掻き壊してきた宮内にとって傷の奥に無限など見出すことはできず、それはただ縫って治し続けなければならないものなのだ。

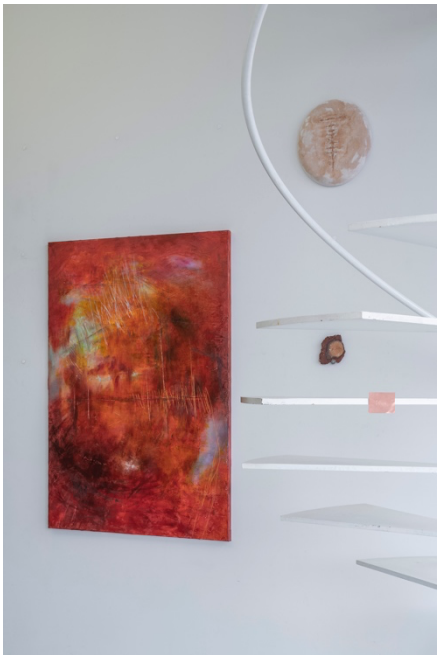
翻って、上記の 2 作の表現上の特徴において確かに言えることは、作品表面の傷は痒みが引き起こす掻破によるものだけではなく、より普遍的な心身に纏わる苦しみの表象となっているということだ。傷は《Scar Script》においては記号となり、《Scar Script - Psyche》においては治療痕となった。また両作品では、掻くことを制御不能な自傷行為として捉えるのではなく、形式的・象徴的なフェーズへと移行させることで、能動的な対象化が行われていると言えるだろう。

最後に、作家と同じ疾患をもつ男性の背中を撮影した写真作品《Scar Script – Score》における痒みの表現の分析で本論を締め括ろうと思う。本作の制作過程ではまず、背中に四線譜を縦に連なるように描き、絵具が乾かない内に、それをいつもしているように掻いてもらう。背中は皮膚が薄いため痒みが出やすいが、身体の正面よりも当然思い通りに掻くことができない。そのため、四線譜は一部だけに歯痒い指の痕跡を残す。

偶然性を用いた作譜方法は、ジョン・ケージやフルクサスの作家が用いたチャンス・オペレーションがよく知られているが、本作においては整然とした楽譜が痒みに従って乱れる、その容態をスコアとして提示している。また、マン・レイの《アングルのバイオリン》(1924年）を想起させる構図の本作だが、女体をバイオリンに見立てた同作とは異なり、オブジェとして身体を扱うのではなく、共感の眼差しに貫かれた同種の痒みを共有する身体として表象されている。

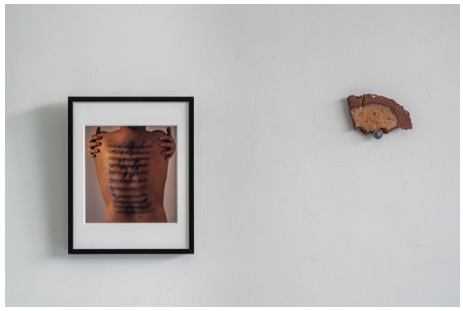
《Scar Script – Score》は被写体の具体的な痒みの表出というだけでなく、スコアを生むという点で、掻破行動を芸術的営為へと変換、そして好転させる表現にもなっている。また、作品で痒みを扱うとき、宮内は自身の経験をもとにしてきたが、本作は他者の痒みを表現したという点でこれまでの作品とは大きく異なる。皮痒の苦悶を他者との関係で捉えるという新たな試みからは、一方通行だった《A Red Life》における痒みの伝達から離れ、当事者の双方向的なコンパッションに作家の関心が移っていることが見て取れる。

いみじくも作家自身が本展のオープニングトークで言及していたが、掻くという動作が痒みに苦しむ他者に向けられたとき、それは相手を労り、安らげることに繋がる。他者に向けられた共感と同情は、作家から観客へと伝播し、経験できない他者の苦しみへの想像力の糸口となるだろう。



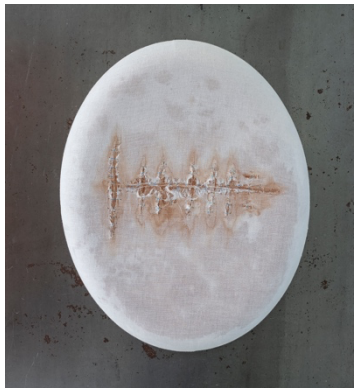
《Scar Script Ⅰ》2023

《Scar Script Ⅳ》2023



《Scar Script - Score》2023

《Scar Script – Psyche Ⅱ》2023



《Scar Script – Psyche Ⅰ》2023

写真：ToLoLo studio